



ジョナサン・ベネディクトの5分で学ぶ父親業 ● その4

父の財布

父の財布は、小さい時から私の目に焼き付いています。分厚くてズボンの後ろのポケット入れると、いつも四角くはみ出ていました。たくさん入っていたのはお金ではなく、家族写真でした。

私たち8人兄弟は、昭和20年から40年代に神奈川県藤沢市で宣教師の家庭に生まれました。私は、お下がりを着て育った4男です。貧乏とは言わないまでも、無駄使いをする余裕はなく、いつも他人が金持ちに見えました。しかし、お金が必要なときは父は財布を開いてくれたので、子どもの私は全く心配していませんでした。その時は深く考えていたわけではありませんが、今になって、「神さまは全ての必要を備えてくださる」という信仰を持っていたのは、父の財布のおかげだと思います。

大人になって、家を離れて学校へ行ったり、宣教活動で出かけた時、父はいつも私の経済的な必要を考えてくれました。別れるときに、いつも同じパターンで、現金の入った茶封筒をそっとだれも見えない時に渡して見送ってくれるのです。

ある日、海外から帰国した時、

両親と連絡がとれず、お金が完全に底をついてしまい、バスや電車に乗る小銭もなかったことがありました。空港までは来れましたが、そこから家まではどうしようかと思ったのです。

「そうだ、とにかくうちまで行けば父がなんとかしてくれる」と確信し、タクシーに乗りました。うちに着いたのが朝の6時。カギは閉まっていたので、ベルをならすと、早起きの父が開けてくれました。私は情けない気持ちで、挨拶もせずに言いました。

「あー、お父さん、タクシー代がなくて困っているんだけど……」

しかし、父は叱ることもなく、久しぶりに帰ってきた私を歓迎し、よるこんでタクシー代を払ってくれました。わたしはこういう父の姿をずっと見て育ちました。

つい先日、突然のように父の愛を思い起こす機会がありました。最近知りあつた宣教師と、思いがけないところで再会した時のことです。普通の会話をしていたら、急に話題を変えて、心配そうにこう訊くのです。

「ところで、ジョンさん、経済

的にはたいじょうぶですか」

私はびつくりして、「はい、神さまは全ての必要を満たしてくれています」と答えました。

しかし、彼はこう言いました。「私たちは夫婦で祈り、母国から持って来たお金をいくらか、あなたにさしあげるように神さまに示されました」

私は、涙がとまらなくなりました。父はもうすでに、3年前に亡くなり、天に召されてしまいました。しかし、今、この宣教師を通してあの同じ「父の財布」の愛を感じたのです。そして、それは本当は神の愛であつたと初めて実感したのです。父親の心は神の心であり、私の父は備え主である神の愛を示していたのです。当たり前のことかもしれませんが、私は深い真理にふれた気がしました。

私は父から、家族の必要に備えることを知らず知らずに教わりました。今、自分の子どもが出かける時、海外に行く時などで、何か必要な時、父がしていた事を自然にするようになっていきます。

「受けるよりも与えるほうが幸いです」(使徒 20章 35節)

与えるのはお金や物だけではあ

りません。「心」もそうです。その「与える心」を自分の子どもにも継承していくことを祈りたいものです。

「あなたがたも、自分の子がパンをくださいと言う時に、だれが石を与えるでしょう。また、子が魚を下さいと言うのに、だれが蛇を与えるでしょう。してみると、あなたがたは、悪い者ではあつても、自分の子どもには良いものを与えることを知っているのです。とすれば、なおのこと、天におられるあなたがたの父が、どうして、求める者たちに良いものを下さらないことがありましよう」

(マタイ7章9-11節)



文=ジョナサン・ベネディクト
1956年山口県岩国市生まれ。宣教師2世。
4男6女がいる。長野県在住。
清泉女学院大学講師。
著書「ふたりのために」